

狐仙
お見通し
さまには

1

—かりそめ後宮異聞譚—



俊輝(しゅんき)

元は武官だったが、暗愚な先帝を討って皇帝の座に就いた。豪放磊落で細かいところは気にしない性格。

昂宇(こうう)

祭祀や儀礼を取り仕切る機関である太常寺で働いている方術士。女性に苦手だが、本質が狐仙である魅音とは普通に話することができる。

魅音(みおん)

県令(県知事)の家の使用人だが、その正体はある事情から人間に生まれ変わり、神通力を完全には使えない狐仙。仕えている家の娘の代わりに皇帝の妃として後宮に入ることになった。



艶蓉(えんよう)

先帝に見初められた下級貴族の娘。先帝が討たれた際に自害した。鎮魂の儀式により方術を施された廟に封印された。

青霞(せいか)

方勝宮で暮らす皇帝の妃の一人。先帝時代は宮女として勤めていたため、後宮に詳しい。俊輝が皇帝になってから、家柄が良く能力もあるということで妃に取り立てられた。

美朱(びしゅ)

珊瑚宮で暮らす皇帝の妃の一人。戸部尚書(財務大臣)の娘。他の妃たちのことを見下しているような態度を取っているが……。

天雪(てんせつ)

角杯宮で暮らす皇帝の妃の一人。禁軍大將軍の兄の友人であった俊輝とは面識があり、もう一人の兄のように慕っている。ニコニコぼやぼやしている天然娘。

目次

その一	狐仙妃、後宮の結界に囚われる	〇〇六
その二	狐仙妃、後宮の人間関係に悩まされる	〇四九
その三	狐仙妃と、蝶の耳飾りに宿るもの	〇七四
その四	狐仙妃、螺鈿の鏡から妃を救う	一四
その五	狐仙妃と宮女のしやれこうべ	一五二
その六	狐仙妃、孔雀の髪飾りの真実を知る	二〇三
その七	狐仙妃が愛してやまないもの	二五八
番外編	根暗な方術士は癒されたい	二八一

狐仙 お見通し

― かりそめ後宮異聞譚 ―

さまには

1

その一 狐仙妃、後宮の結界に囚われる

皇帝の妃きさいに選ばれ、入宮して、一ヶ月。

『陶翠蘭とうすいらん』は、後宮を出て行くことになった。

頭から被巾シヨールを被かぶった女は、うつむいたまま石畳いしだたみの上を歩いていった。翡翠色ひすいの裙スカートの裾すそが、寂しげに揺れる。

先導する宮女が、ちらりと振り返った。

「翠蘭様。アザ、痛みますか？」

「いいえ」

『翠蘭』と呼ばれた彼女は、返事をしながら少しだけ顔を上げた。被巾の隙間から、意志の強そうな吊り気味の目が覗くのぞ。その頬ほおには、うつすらと青緑色のアザができていた。

彼女はまた顔を伏せ、袖そでで口元も隠す。

「心配、ありがとう。こんな色だけで、痛みはないの」

「そうですか。本当に、いったい何が原因なのかしら……医官も結局、治せないなんて」

「仕方ないわ。胸や背中にも出てしまったし。お見苦しい姿を、陛下にお目にかかるわけにはいかないもの」

「ええ……翠蘭様も見られたくないでしょうし……。にしても、一度も陛下にお目通りすらしなまま、後宮を出ることになるとは」

宮女は氣遣わしげだ。

石畳の先、外へと繋がる西門へ向かいながら、『翠蘭』は答える。

「こんな私に陛下はお見舞い金を下さって、心から感謝しております。せっかくなので、都の宿で故郷からの迎えを待つ間、他の医者にも診てもらうことにするわ」

後宮を取り囲む、分厚い壁までたどり着いた。

春を迎えて、日射しは暖かい。うらかな風が彼女を送るように、どこかで咲いている桃の花びらをヒラヒラと運んできた。

彼女は門の前で振り向き、胸の前で両手を重ねると、一ヶ月を過ごした後宮に向かって丁寧な礼をした。

「お世話になりました。私はお役に立てませんでした、照帝国の、そして皇帝家の繁栄を、心からお祈りしております。……あなたにも、世話になったわね」

「いいえ、私は何も。……故郷までの旅路、どうかご無事で。ご病気の速やかな治癒を祈っております」

礼をする宮女に、彼女は寂しそうに微笑んでうなずきかけた。

そして再び、くると門に向き直る。

誰も見ていない被巾の陰、口元を隠した袖の下で――

ニマツ！ と、ご機嫌な笑みが浮かんだ。

（さー終わった、帰ろ帰ろ！ やーっと以前の生活に戻るわー）

豪華な丹塗りの門扉は、彼女を牢獄から解き放つかのように、大きく外へと開いていた。彼女が意気揚々と足を踏み出した。その瞬間。

パチイツ、と、空間に雷のようなものが走った。

「うあっ!？」

いきなり何かに身体を締め付けられ、彼女はギョツと目を見開いて胸元を見下ろした。

青白く光る紐のようなものが、腕ごと胴体を取り巻いている。

「翠蘭様、どうかしましたか？ 忘れ物でも？」

宮女の、戸惑った声。どうやら宮女には、この紐が見えていないようだ。

（何これ、方術!？）

方術、というのは、神仙の力を借りてかける術のことである。

あわてて彼女が辺りを見回すと、パチツ、ビリビリツ、と後宮の壁の内側に沿って光が走っている。後宮をぐるりと取り巻いているのかもしれない。

（ひと月前、ここから後宮に入った時は何もなかったのに！　とにかく、このままじゃ脱出できなくなる。逃げなきゃ！）

彼女は無理矢理、足を踏み出した。門はすぐ目の前なのだ。

しかし、足を動かした瞬間、バチッ！

青白い光がさらに空を走り、今度は足を束ねるように膝に巻きついた。

当然、彼女は前のめりにスッ転ぶ。

「きゃひんっ！」

被巾がふんわりと脇に落ち、顔が露わになった。

（くっ、動けない。身体が痺れてきた……！）

そこへ、駆け寄ってくる足音がした。つま先の四角い履が視界の隅に入り、男の得意げな声が降ってくる。

「かかったな、妖怪め！」

「なっ、何言ってるのよっ、私はただの人間っ……！」

かろうじて顔を捻り、見上げた。

そこに立っていたのは二十代前半くらいの、ひよろりと背の高い男だった。長い黒髪を後ろで一つに束ね、手に何か薄っぺらいものを持っている。

霊符だ。人間一人一人が持つ霊力を使って術をかける際に使う、呪文の書かれた紙札である。

（やばっ、術士！）



「この結界に引つかかるのは妖怪だけだ。尻尾しっぽを出せ！『頭けん』！」

術士の男が、シュツ、と霊符を振り下ろした瞬間――

――彼女が、自分で自分にかけていた術が、解けた。

「あつ、ちょ、やめ、うっそおおん」

身体を取り巻いていた力が消える。

宮女が目丸くして、つぶやいた。

「え、翠蘭様、顔のアザが消えて……あつ、耳と尻尾!？」

「んぎゃっ」

『陶翠蘭』の頭にはとんがった大きな耳、軽くめくれた裾の裾からはフサフサの真っ白な尻尾が覗いていた。あわてて霊力を巡らせて引つ込めたが、もう遅い。

そして、さっきまで顔にあった青緑色のアザは、すっかり消えていた。

若い術士は冷ややかな、しかし勝ち誇った笑みを浮かべる。

「正体を現したな。化け狐きつねだったか」

術士たちが集まってくる中、彼女はくつきりした吊り目で術士をにらみつけた。

（くっそお。もう少して成功だったのに！）

陽がとつぷりと暮れた。

照帝国の都・天昌てんしょうは、二重の外壁に囲まれており、天昌城とも呼ばれる。その北の中央部に、

皇帝が起居し執務する永安宮と呼ばれる建物群があつた。あちらこちらで篝火が焚かれ、夜空に火の粉が昇り、星屑に紛れていく。

『陶翠蘭』は後宮ではなく、この永安宮の奥まった一室に連れてこられた。青白い紐はすでに消えていたけれど、物理的に麻縄で後ろ手に縛られている。罪状は、後宮を脱走しようとした罪、という事になっていた。

目の前には、三人の人間がいる。

まずは、さっきもいた宮女の雨桐。『彼女』をチラチラ見て、温和な顔にひたすら困惑した表情を浮かべている。

次に、霊符を使って彼女を捕まえた術士、昂宇。ギロリとした目つき、とんがった雰囲気の際は、真面目そうだが根暗そうでもある。彼がこの部屋に方術をかけているため、彼以外の者は術を使えない。

最後に、真正面。美しい彩雲の描かれた壁絵を背にし、大きな椅子にゆったりと腰かけている、その人は。

彼女が会わずに終わるはずだった照帝国の新皇帝、王俊輝その人だった。

「その娘が、『陶翠蘭』か？」

元々は將軍職に就いていた彼は、大柄な身体に似合わない身軽さで立ち上がると、彼女に近づいてきた。

彼は多くの味方の支持を受け、暗愚を極めた先帝を討った。そしてそのまま皇帝に推され、帝位

に就いたばかりだ。まだ二十代半ばの若さである。

今現在、政務が滞^{とど}っている間に異民族に奪われた土地を奪い返し、腐敗を招いた臣を肅清^{しゆくせい}し、永安宮を追われた有能な人材を呼び戻して人事をやり直し……と多忙な日々を送っており、その姿には覇氣^{はき}が漲^{みなぎ}っていた。

俊輝は、彼女の目の前に立った。高いところから鋭い視線で見下ろされると、ものすごい圧を感じる。

「報告では、陶翠蘭という県令の娘が後宮に入って間もなく病氣になり、顔や身体にできた青緑色のアザが消えないと聞いていた。それで、故郷に帰ることを許したのだが……。しかし、この娘にはアザなどない上、耳と尻尾を見せただと？ 化身^{けしやう}の者だったとは。いったい、何のために後宮にいたのだ」

「それを、これから白状してもらいましょう」

昂宇が靈符を手に、一歩踏み出した。

彼女は二度、小さく舌打ちをしてから、鼻で笑ってみせる。

「あら、ずいぶんお若い方。あなたみたいなひよっこ方術師が術をかけたところで、私にしゃべらせることなんてできるのかしら」

淡々^{たんたん}と昂宇は答えた。

「そうですね。では先に殺してから、魂を呼び出す術を使ってしゃべらせましょう。若いので気が短くてすみません」

「待て待てそうじゃないつ。普通にしゃべるつて言ってるの！」

一瞬で彼女は降参する。

「あーもう。翠蘭様、さすがに死ぬわけにはいけないのでしゃべります、ごめんなさい！」

「つまり、お前は『陶翠蘭』ではないのだな？」

腕組みをした俊輝に聞かれ、彼女はエヘへと愛想笑いした。

「はい、陛下。翠蘭様のお世話をしていた、もうホントに取るに足らない、陶家の下女でございます。でも人間ですよ、つと」

ぱらり、と手首を縛っていた縄を下に落とし、ぶるぶると手首を振る。

「ああ、痛かった」

「なつ、お前！」

気色^{けしき}ばんだ昂宇が、反射的に彼女と俊輝の間に割って入った。彼女は両手のひらを見せながら、彼を見上げる。

「痛いから外しただけよ、皇帝陛下に逆らうようなことはしないわ。……ありがと、もう行つていよ」

左の手のひらには、ネズミが一匹、載っている。白と黒のまだらという変わった模様だ。

彼女が軽く舌を鳴らすと、ネズミはチュツと応えるように鳴き、手から飛び降りて走り去っていった。

「ネズミに縄を噛^かみ切らせたのか」

俊輝は感心したように顎を撫で、昂宇はますます目つきを鋭くする。

「眷属として操れる、ということか？ やはり妖怪なのだな？」

彼女はムツと頬を膨らませた。

「その辺の妖怪と一緒にしないで。狐仙ですっ！」

狐の妖怪が修行を積み、神に近い存在になったのが、狐仙である。

「ほう。狐仙」

「い、今はまあ、一時的に生まれ変わって、ただの人間だけ……」

彼女はももごと口ごもってから、改めて顔を上げて皇帝を見据えた。

「名で呼び下さい。私の名は、魅音。胡魅音と申します」



話は二ヶ月ちよつと前、年明け早々にさかのぼる。

魅音は、とある県を治める県令・陶氏の家で、下女としての日々を送っていた。身よりのない彼女は孤児院にいたところを、運良くこの家に引き取られたのだ。

県令には、娘の翠蘭がいた。魅音は掃除や洗濯以外に、翠蘭と同じ十六歳ということで、彼女の話し相手や身の回りの世話もしている。

翠蘭は、少々わがままで甘えん坊。文句を言いながらも、裁縫やら踊りやら良家の娘としてのア

レコレを学び、残りの時間はひたすら書に没頭している文学少女でもある。

彼女は卵が嫌いだ、魅音が卵好きを知っている。食事に卵料理が出ると、器をこつそりと「食べていいわよ」と魅音に渡しにくるのが常だった。味のついたゆで卵とか、ふわふわ卵の湯スープなどもだ。

そんな翠蘭が、魅音は実は可愛かわいくて仕方がない。

（孫ってこんな感じかしらー！）

狐として生まれ、何度も生まれ変わって二百年の修行を積み、狐仙となった魅音にとって、人間の十六歳の娘など赤子に等しい。そんな翠蘭が、魅音の好物である卵をくれるというのは、可愛以外の何ものでもなかった。

（ちよっとくらい人間で過ごすのも、悪くないわね）

さて、翠蘭のところには週に二日、高名な老師せんせいが学問を教えにくる。

老師にお茶をお出して下がった後、翠蘭が学んでいる間、魅音は休憩時間だ。

厨房ちゅうぼうからこつそりと、裏庭に出る。灰色の空の下、白い息を吐きながら庭石に腰かけると、魅音はチッチッと二回舌打ちをした。

すると間もなく、ちよろつ、と膝に灰色のネズミが上がってきた。

そのつぶらな瞳ひとみをじつと見つめ、魅音は命じる。

「行っておいで」

ネズミはピクッと耳を動かしてから、魅音の膝を降り、翠蘭の部屋の方へと姿を消した。ネズミ

は狐の眷属で、言うことを聞かせられるのだ。

魅音は目を閉じ、ネズミの視界を共有する。

本性が狐仙でも、器が人間だと、使える力はかなりのコツだ。操れるのはネズミだけだし、あとはせいぜい簡単な変身ができるくらい。白狐になら、いかにも普通の白狐の姿に変身できるけれど、他の生き物に化けようとした場合は身体の大きさを変えられない。見た目をちよつといじれる程度なので、人間が変装するのと大して変わらないのだ。

魅音の視界に、先ほどのネズミが見ている景色が映った。低い視点でちよろちよろと廊下を走り、壁の穴から入って柱を上る。そして屋根裏にやってきたネズミは、天井の穴から翠蘭の部屋を見下ろした。

老師の声が聞こえ、翠蘭が筆で紙に何か書きつけている。

下女にすぎない魅音は教育を受けることができないのだが、こうしてこっそり翠蘭の様子を覗いて学ぶのが楽しみだった。しかも翠蘭は興味の範囲が広く、老師に様々な質問をするので、老師もあれこれ教えたくなるらしい。詩歌ばかりでなく、兵法から薬学、果ては官吏試験に出るような内容まで織り交ぜてくれる。女である翠蘭は官吏にはなれないので、必要ないにもかかわらず、である。

魅音は夢中で講義に聴き入った。

そんなある日のことだった。

「イヤよイヤ、ぜったいに、イヤ！」

翠蘭の部屋から、叫び声が聞こえてきた。

驚いた魅音は、様子をうかがうためにネズミを呼ぼうとしたが、そうするまでもなくさらに声が聞こえてくる。

「後宮になんて行きたくない！」

（はあ？）

魅音はギョツとした。

後宮——皇后や妃、そして宮女たちが暮らす場所。帝国全土から集められた女性たちは、たった一人の男性、皇帝のためだけに、そこで生きることになる。

どうやら翠蘭に、そんな後宮に入る話を持ち上がっているらしい。最近、新皇帝が即位したので、彼のためにそれなりの身分の若い女性が集められているのだろう。

けれど、翠蘭は本気で拒否している。

「私知ってるのよ！ あそこに行った女の人、何人も殺されてるって聞いたもの。ちょっとしたことで罰せられて毒を飲まされたり、戯れに首を絞められたり！」

翠蘭が言っているのは、本当のことだ。ただし、暗君あんくんだった先帝の後宮の話、つまり二ヶ月ほど前までの話である。

先帝は色に溺れ、様々な女性たちを集めたが、中でも珍貴妃ちんきひと呼ばれる女性に夢中になった。貴

妃、というのは、皇后を除けば後宮の女性で最も高い位の称号である。

この貴妃が残酷な嗜好の持ち主で、先帝と二人、他の妃たちを痛めつけては楽しんでいたらしい。死んだり大けがをしたりした者もいれば、心を病んだ者もいるそうだ。

昨年未、とうとう先帝は討たれ、追いつめられた珍貴妃も後宮の自分の宮で自害した。

胸に短刀を突き立てた彼女は、

「呪^{のろ}ってやる……呪^{のろ}ってやる……」

と繰り返しながらこと切れたという。

二人はそれぞれ、生まれながら持っている霊力——魂の力——がそれなりに高かったので、廟^{びやう}に厳重に封じられた。先帝は、皇帝家から罪人が出た際に葬られる廟に。そして珍貴妃は後宮内の罪人が葬られる廟に、だ。

この政変は、関係者の逃亡を防ぐためにしばらく伏せられていたが、いよいよ県令などある程度の地位の人間には情報が伝わって来たところだった。

珍貴妃は孔雀^{くじゃく}の意匠を好み、衣服や装身具に孔雀の羽の柄を多く取り入れたので、現在、その意匠を使うことは禁忌^{タブー}となっている。

耳を澄ませると、翠蘭の父である県令の声が聞こえてくる。

「いや、後宮がひどい状態だったのは、先帝の時の話でだな。だからこそ討たれて、新たな陛下が即位なさったのだから、そんなことは」

「後宮には、いびり殺された女たちの幽鬼ゆうきが出るって聞いたわ。それに、珍貴妃が新しい陛下を呪ってゐるって。呪われてる人の後宮に入ったら私も呪われる！」

幽鬼とは、要するに死者の霊のことである。

「これ、声大きい！」

たしなめる県令の声に続いて、その妻の声が続く。

「でもあなた、翠蘭が恐ろしく思うのも無理はありませんわ。それに、ただでさえ後宮は、陛下の寵愛ちようあいを巡って争いの起こりやすい場所です。そんなところに、一人娘の翠蘭を行かせるなんて……婿むこをとるつもりでしたのに」

「それはまあ……しかし、新皇帝の後宮に、この郡から誰かしら差し出さないことには」

郡、というのは、いくつかの県のまとまりの名前だ。県令はおそらく、郡からの命令に従わなくてはならないのだろう。

「嫌ですってばあ！ どうして私なの!? みんな行きたくないはずよ。県令の娘だから、お手本として行かなくちゃいけないの？ だったら私、こんな家に生まれなければよかった！ うわあああん！」

翠蘭の号泣が聞こえ、今度は県令の妻が娘をたしなめていたが、もはや県令はうろたえるばかりのようだ。

（そんなあ、困った）

魅音は思う。

（お嬢さんが後宮に行ってしまったら、もう老師は来てくたさらない。私、勉強できなくなってしまうではないの！）

もっともっと勉強し修行すれば、狐仙からさらに神仙という高みに昇れる。そのために、翠蘭に行かれてしまつては困るのだ。

（それに、何年もお世話しているからわかる。お嬢さんは本当に怖がりで、怪談系の話も一切受けつけない人だから、恐ろしい噂うわさのある後宮で暮らしたりしたら病氣になっちゃうわ。行かせるのは可哀想かわいそう）

そこで魅音は、ある決心をした。

翌日、魅音は願い出て、県令夫妻と翠蘭に話を聞いてもらった。

「申し訳ありません、昨日のお話が、耳に入ってしまった」

「ああ……いや、あれだけ大きな声で話していたのだから仕方ない」

県令は鷹揚おうように許したが、魅音はさらに言う。

「それで、あの……誰かが行かなくてはならないのであれば、私が、お嬢さんの身代わりになるのは、どうかと思うのですが」

「魅音が？ 身代わりに？」

県令の妻は、戸惑っているようだ。

「何を言ってるの、聞いていたのでしょうか？ 後宮に行ったら恐ろしい目に遭あうかもしれないと、

そういう話をしていたのですよ。あなたはそれでも行きたいと？」

「まさか、魅音」

翠蘭は眉を擧める。

「そんなに、うちでの暮らしが不満なの？　後宮で一発逆転、陛下の目に止まるかも……って夢みるくらいに？」

「ち、違います、逆です！」

魅音は急いで言う。

「身よりのない私を引き取っていただき、お嬢さんにも優しくしていただき、心から感謝しておりました。いつか恩返しをしたいと思っていたので、身代わりになりたいのです。もちろん、救っていただいた命を粗末にするつもりはございません。仮病を、使ったらどうかと」

「仮病？」

「はい。私がお嬢さんのフリをして後宮に入り、そして時期を見計らって、もうとにかくすつごく体調が悪いフリをするんです。そうしたら、郷に帰されるでしょう？　私、ここに戻って来れます。それまでの間くらいなら、何か恐ろしいことがあっても我慢します。私、お嬢さんほど賢くないですけど、すぐに体調を崩せばごまかせると思いますし」

県令は眉を擧める。

「しかし仮病などと、後宮の医官に見抜かれるのでは」

「何でもしますっ。寝ないとか、食べないとかしていれば本当に体調は崩れるでしょうし、わざと

吐くくらいできますし」

熱意を込めて、魅音は続けた。

「いったん郷に帰されれば、もう呼ばれることはないと思うのです。そして、病気が治ったことにすれば、本物のお嬢さんはお婿様を迎えることができます」

そして引き続き、翠蘭も、翠蘭の子も老師から学ぶだろうから、魅音も学び続けられる、という寸法である。

魅音は上目遣いで聞いた。

「いかがでしょうか？」

県令夫妻は顔を見合わせ、そして話し合いを始めた。

その間に、翠蘭が魅音に近寄ってきた。ぼそつ、とささやく。

「……悪かったわ。ホントに、私のために申し出てくれたのね。私は魅音とずっと一緒のつもりだったから、行っちゃうって思ったら何だか……寂しくて」

「ちょっとした間だけです、ちゃんとお嬢さんのところに帰ってきます！ だいたい、私が陛下の目に留まるなんてありませんから」

魅音は笑い交じりに言い切ったけれど、翠蘭はツンとそっぽを向きながらつぶやく。

「バカね、自分じゃわからないのかしら。魅音って結構……可愛いのに」

（あら、私のこと、そんなふうに）

翠蘭のこういうところが、魅音はますます可愛いと思うのだ。

そしてついに、県令夫妻は魅音を、翠蘭の身代わりとして後宮に送ることに決めたのだった。

出発の日。

魅音は翠蘭の襦裙（じゆくん）（上下）を身にまとい、良家の娘つぼく化粧をする。元々、翠蘭はタレ目、魅音は吊り目というところ以外、二人は背格好が似ているのだ。しかも、後宮に翠蘭の顔を知っている人物などいないので、狐仙の力で翠蘭に化けるまでもない。

「なんか、化粧、うまいのね」

翠蘭に感心されて、魅音はちょっと焦りつつ「み、見よう見まねです」とごまかした。

（二百年の年の功ってやつよ！ 人間の観察だっけてしたもの！）

翠蘭は心配そうに言った。

「魅音、本当にまずそうだったら、時期を見計らって……なんて悠長なことしてないで、すぐに病気のフリをして帰ってくるのよ。絶対よ」

「お嬢さん……そんなに心配して下さるなんて」

ちよっと感動して魅音が両手を合わせると、翠蘭はふいっとそっぽを向く。

「べ、別にあなただけのことじゃなくてっ、『陶翠蘭』が呪い殺されたら本物の私が困るでしょ！ いいから気をつけなさい！」

しかし、魅音には絶対にうまく行くという自信があった。

につこりと、笑ってみせる。

「はい。とにかく、私もここに絶対に戻ってきたいので、頑張りますね。行って参ります！」

魅音の暮らしていた県は、照帝国の都・天昌から馬車で数日の距離だ。後宮入りは公おおやけの職務なので、旅には街道沿いの駅を利用できる。無料で宿泊したり、食事をしたりできるのだ。

その途中、後宮にまつわる噂を聞いた。

「後宮は、死んだ妃たちの幽鬼や鬼火がちょいちょい現れるんだってな」

「いや、陛下が大々的な鎮魂の儀式を行ってからは、落ち着いたらしい」

「我が国の方術士たちは、死者にはとりわけ手厚いからな」

魅音は聞くともしに聞きながら、思う。

（ふーん、鎮魂の儀式をやったのか。対症療法で終わってはいないけどね。ま、行ってみればわかるか）

駅を辿たどって旅をし、明日は天昌に到着するという日の夜。

魅音は一人、宿の裏庭に出た。

早春の冷たい空気の中、ほんのりと梅の香が漂う。見上げれば、夜空は星屑の海だ。北斗七星がくつきりと、空に描かれている。

魅音は胸の前で、握った拳こぶしを交差させると、両手の人差し指と中指を揃そろえて伸ばした。

「北斗星君ほくとせいくんの名の下に。我が身よ、偽いつわりの姿を宿せ！」

ふわっ、と、風が身体を取り巻いて、すぐに消えた。

魅音は手を開くと、そつと胸元を開いてみる。

左の胸に、青緑色のアザができていた。これは今、彼女が望んで現れるようにしたものだ。このくらいの変身なら簡単である。

（仮病がばれるんじゃないかって県令夫妻は心配していたけど、こうやって病人に変身すればいいんだから、簡単、簡単。わざわざ具合が悪そうなフリをしなくても、これで十分でしょ。だって、こんな肌をした妃なんて、皇帝陛下は手をつけないでしょうし）

翠蘭に「陛下の目に留まることなどない」と言い切ることができたのも、この術を使うつもりだったからだ。

胸元を直しながら、魅音はほくそ笑む。

（妃の一人として行くんだから、きつと宮女が私の世話をしてくれるはず。うまく機会を作って、宮女にこのアザを目撃させよう。医官を呼んで調べさせても、原因はわかりっこない。アザは、日を追うごとにじわじわと増やしていこう！）

ところが。

後宮は、魅音の予想とは少々違う様子だったのだ。

まずは、天昌城に到着する。二重の外壁に開いた門を通り抜けると、一気に明るくなって視界が開けた。

そこは、帝国中の人々だけでなく、東方や西方から様々な人種の人々が集まる巨大な都市だ。賑やかな大通りには店がずらりと並び、市場に行けば揃わないものはない。

何台もの馬車が行きかう大通りは、皇城の門へと繋がっている。政務機関が集中する区域の入口だ。その門も巨大で、まだまだ距離があるはずなのに、まるですぐ近くにあるかのように錯覚するほどだった。

皇城の奥が、皇帝のおわす永安宮。その西側が、後宮である。

魅音は、手配された輿に乗って運ばれながら、御簾の外を眺めていた。

（前世ぶりに都にやってきたけれど、ずいぶん賑やかになったものね！ 後宮の中はどうか。ちよっと楽しみ）

どうせすぐに抜けるのだからと、魅音は呑気に構えている。

（私、というか翠蘭お嬢さんは県令の娘なんだから、きつとそれなりの品階になれるわよね。しばらく働かずにのんびりできそう！）

皇城の西側にぐると回れば、後宮の入口にあたる門があった。魅音は馬車から降りる。陶家の使用人たちは、ここでお別れだ。

「頑張れよ」

「気をつけて」

事情を知っている使用人たちは、ひそひそと魅音を励まし、去っていった。

後宮は、正式名称を掖庭宮えきていきゅうと言う。永安宮の掖わきにあるからだろう。高い堀と水濠みずぼりに囲まれた広大な一角で、いくつもの宮や庭園、祠ほくらや廟などがあり、小さな都のようになっている。ないのは店くらしいものだ。

門卒もんそんに案内されて水濠の橋を渡り、西門からいよいよ後宮に入る。

するとすぐそこが、内侍省ないじの建物だった。内侍省とは、宦官かんがん——男性機能を切除した官吏——が所属する機関で、皇帝の私生活を管理する。

先に知らせを出してあったので、内侍省の一室で宦官と宮女が一人ずつ待っていた。この二人が、魅音の世話を担当するようだ。

宦官とはすぐに別れ、魅音は宮女に案内されて、渡り廊下を進んだ。

「陶翠蘭様のお世話をさせていただきます、雨桐と申します。このたびは、入宮おめでとうございます」

三十歳ほどだろうか、しっとりしたたたずまいの雨桐だが、どこか申し訳なさそうにしている。

「ご存じの通り、王將軍……陛下が帝位にお就きになって、まだそれほど経たっておりません。後宮も調っておらず、宮女の数も最小限でございまして、翠蘭様にも個別の宮を用意することができず

……」

「他の妃たちと一緒に暮らす、ということ？ 別に構わないわ、気の合う人がいれば楽しいでしょうし」

「恐れ入ります。いずれ、細かいことも決まってくると思いますので」

ひたすら恐縮する雨桐だったけれど、魅音にはしめたものである。

（そんなにバタバタしてるなら、陛下も当然、後宮にはいらっしやらないでしょうね。よしよし）歩きながら、雨桐はすらすらと後宮での生活を説明してくれた。魅音は感心する。

「とてもわかりやすいわ。雨桐も、宮女になったばかりでしょうに」

「あ、いえ……私は、先帝の代から宮女をしております」

「えっ、そうなの？ みんな、怖がって逃げてしまったかと思った。噂を聞いたわよ」

「そういう者も多かったのですが、帰る場所のない者もありますし、他にも色々……」詳しくは語らなかったものの、雨桐は微笑む。

「陛下が儀式を執り行って下さいましたので、きっと大丈夫です」

話をしながら到着したのは、内院なかにわを中心なかにわに四方が建物になっている宮だった。

「花籃宮からんきやうでございます」

名前の通り、淡い紅色の花を咲かせる杏あんずの木や、小さな黄色い花をたくさんつけた山菜莢さんしやうなどで、内院は華やかだ。雨桐は奥へと進む。

「お妃様方にはひとまず、こちらにお部屋をご用意してございます」

（そうか、私も『妃』って呼ばれるんだった）

そのつもりなどないわ、似合わないわで、魅音は何だか背中がもぞもぞした。

内院はなを挟んで左右の建物に、戸が四つずつ並んでいる。

「東側の手前、お二つが、翠蘭様のお部屋です。お荷物は運び込んでおきます」

教えてくれた雨桐は、さらに正面の正房おもやに魅音を案内した。

「ひとまずこちらで、部屋のお支度が済むまでお待ち下さい。居間になっておりまして、皆様、こちらでおくつろぎです」

「ありがとうございます」

「後ほど、お茶をお持ちします」

雨桐は礼をして、立ち去っていく。

(さあ、いよいよだわ)

魅音は一呼吸置いてから、居間の両開きの戸を開いた。

居間には、若い娘が三人、いた。

奥の丸窓のそばには卓子つくえと椅子があり、薄紅色の襦裙をまとった美女が一人、茶を飲んでいた。ちらりと魅音に流した視線、スッと伸びた背筋、まとう澄んだ空気……おそらく高貴な出自の女性だろう。魅音と同じくらいの年頃に見える。

そして、後の二人は手前の長椅子に並んで座っていた。こちらも良家の女性という感じでありながら、ぐっと碎けた雰囲気くふき。何か話をしていただけけれど、魅音に気づいて振り向く。

濃い青の襦裙の方は、翠蘭より少し上の年頃で、愛想のいい笑顔を見せた。淡い水色の襦裙の方はやや幼小、もしかしたら十三、四くらいの年齢かもしれない。ふっくらした頬にえくぼを浮かべ

てはにかむ。

(どなたがどこのお嬢さんなのかしら。家格がわからん……)

とにかく、両手の平を身体の前で重ね、頭を下げて無難に挨拶する。

「初めまして。陶翠蘭と申します」

すると、手前の二人はそわそわしつつも何も言わず、奥の女性だけが口を開いた。

「私が、李美朱よ」

(私『が』?)

それは明らかに、「当然私を知っているわよね」というニュアンスだ。

(いや知らんがな)

仕方がないので、ひとまずもう一度礼をすると、美朱はスッと立ち上がった。そして、するすると滑るように魅音の方に歩いてくる。

「あなたが来て、やっと揃ったというわけね」

ため息混じりにそんなことを言いながら、美朱という彼女はそのまま外に出て行ってしまった。

戸が閉まる。

(『揃った』?)

首を傾げていると、待ちかねたように長椅子の二人が声をかけてきた。

「翠蘭さん、座って座って!」

「お疲れ様です」

「あ、ありがとう」

長椅子の端に腰かけさせてもらうと、二人は代わる代わる名乗った。

「私、江青霞こいうせいよ」

「私は、白天雪はくてんせつ。よろしくお願いしまあす」

しっかりと年上らしい方が青霞せいか、おとなしげな年下らしい方が天雪てんせつだ。

「私も、十日ほど前に来たばかりなんです」

ふわりと天雪が笑えば、青霞が軽く身を乗り出す。

「私は先帝の頃から宮女やってたんだけど、ここに残ることにしたらあれよあれよという間に昇格してしまっただわ。ね、それより知ってました？ 妃、私たち四人だけなんですって」

「へ？」

思わず変な声を上げた魅音は、目をぱちくりさせてしまった。

帝国の後宮で一番位が高いのは、もちろん皇帝の正妻である『皇后』である。しかし、新皇帝の俊輝にはまだ皇后がない。

皇后とははっきりと区別された、ありていにいえば妾めかけたちは、『妃』と呼ばれる。しかし、その妃が美朱・青霞・天雪、そして翠蘭（魅音）の四人しかないと言うのだ。

（先帝には百人以上いたと聞いてるけど、新皇帝には四人ぼっち？）

「えっと、あの、まだ到着していませんただけではなく？」

聞いてみると、二人は同時にうなづく。

「四人しか決まっていなみたい。この後は今のところ、誰か来る予定はないですよ」

「陛下も、まだ一度も後宮にお見えにならないんです」

「先帝時代からの宮女も少ない上に、新しい子も少ないの」

「その宮女たちも、美朱様のお世話に忙しいんですよ」

「そう、あの美朱様は強引に、空いている珊瑚宮さんごきゅうを自分の宮って決めちゃって。ちよつとどうかと思うわ」

「宮女たちは、珊瑚宮を調えるのに、精一杯。私たちのことなんて、ほったらかしなんです」

『宮女』というのはつまり、後宮で働く女たちのことである。

（この二人、ずいぶん意気投合してるな。まあ、さっきの……美朱様だっけ？ 彼女があんなふうにツンツンしてるんじゃ、他に仲良くできる人もいなかったでしょうしね）

魅音はニコツと笑ってみせる。

「へえ、そうなんだ。新しい陛下が即位なさって、まだずいぶんゴタついてるとは聞いていたけど」

「そういうこと。まあ、先帝の頃みたいに命の危険がないぶん、気楽ね」

「これからも、何も起こりませんように」

二人は揃って、祈るように両手を合わせた。

色々話してみたところによると、李美朱は戸部尚書（財務大臣）の娘だそうで、矜持プライドの塊かたまりのよ

うな人柄らしい。

照帝国の妃には三段階の位があり、上位が『夫人』、中位が『嬪』、下位が『婦』と呼ばれる。

本来なら『夫人』が暮らす豪華な四つの宮殿があるのだが、美朱はそのうちの一つである珊瑚宮を自分の宮と決めてしまったらしい。四つの中では一番小さいそこを選んだあたりは、一応遠慮なのか何なのか。さすがに、魅音が来た日は顔合わせのために、本来暮らすはずだった花籃宮にいたようだ。

困ったことに青霞や天雪の言うとおり、宮女たちの多くは珊瑚宮にばかり出入りしていた。まあ、自分の高い妃に仕えて美味しい思いをしたいというのは、魅音も理解できる。

もちろん、魅音たちもこの花籃宮に個室があり、食事の上げ下げや洗濯はしてもらえるのだが、主に雨桐が必死で駆け回っており、手の空いた宮女がちらほら助けに来る。着替えや行水は自分で……という感じだった。

(うーん、目論見がはずれてしまった。宮女にアザを目撃してもらおうと思ってたのに、その機会がないじゃないの)

魅音は少々、軌道修正を図る。

(自己申告するしかないな)

後宮に来てすぐ、というのもわざとらしいので、少しでも日にちを置いてから、胸のアザが現れたと訴えよう。そして、しばらくしたらアザを一つ増やし、さらに数日したらまた増やして、何ならアザを大きくして……と「化け直し」ていけばいい。

そう考えた魅音は、ひとまず翠蘭のつもりで、後宮生活を送ることにした。

正直、皇帝の俊輝が来ないのであれば、ここでの生活はとても楽しいものだった。

四人で学ぶ『妃としての教養』は、魅音にとつてはだいぶ生ぬるかったけれど、青霞や天雪とは葉子牌で遊んだり散歩したりすることもできたし、食事はとにかく豊富で味も絶品である。

（でも、皇帝とは関わらずに一生を送りたいし、やっぱり老師のもつと難しいお話が聞きたい。お嬢さんも待ってるしね！）

早く帰りたい、と思いつながら散歩していると、一緒に歩いていた青霞が前方を指さした。

「あそこに、ちらつと森が見えているでしょ」

殿舎の屋根、瑠璃瓦るりがわの上に、こんもりとした緑が見えている。

「あの奥に、罪人が葬られる廟があるの。珍貴妃……あ、本当はもう貴妃って呼んではいけないのだけど、あそこに埋葬というか封印されたのよ。身の回りの品も含めて全部入れられて、方術士が嚴重にね」

天雪が続ける。

「森の中だし、恐ろしいので、誰も近づかないみたいです」

「なるほど。呪われたら嫌なものね」

（先帝と一緒にたって妃たちを苛さいなんでた、か。貴妃が入宮する前から先帝は暴力的だったと聞くけど、貴妃はどうして他の妃たちと同じ運命を辿らなかつたんだろう。先帝よりも暴れたのかしら。

怖っ)

そうして日々を過ごすうち、魅音は不穩な噂を耳にした。

後宮内の池をのぞきこむと溺死した妃の姿が見える、とか、珍貴妃の暮らしていた珍珠宮の跡地に青白い鬼火が飛んでいるのを見た、とか、そういった噂である。

(鎮魂の儀式をしてから、もうそういう怪異はなくなった、って話だったけど……結局、出るわけね。ま、本当なのか宮女たちの気のせいなのかはわからないけど)

靈感がポンコツになっているため、幽鬼がよほど強力だったり、手が届くくらい近くにいたりしない限り、感じ取れないのである。

ただし、魅音にとっては本人が狐仙なだけに、人ならざる存在は身近だ。幽鬼も、珍しいものではないという認識だった。

(元は人間だったんだから、恨みだの未練だの持つくらい当たり前よね。悪ささえしなければ別にいいじゃない、存在くらい許してあげれば。……ま、私には関係ないことだけど。もうちょつとしたらここから出るんだから)

ある日、魅音はとうとうアザに気づいたふりをして、雨桐に訴えた。

「変なアザができてしまつて……医官を呼んでくれる？」

後宮の医官は宦官だけれど、助手の宮女と一緒に来てくれたので、肌を見せるのにも抵抗はない。医官を居間で待たせ、助手を寝室に入れて、アザを診てもらう。そして助手が医官に説明する、と

いう形をとった。

医官はどうにも事なかれ主義のようで、しつかり診てもらえているという感じはしなかったけれど、とりあえず塗り薬を出してくれた。

（まあ、薬では治らないけどね。私が変身を解かない限り）

思いつつも、魅音は礼を言つて受け取る。

助手が、心配そうに声をかけてくれた。

「いつでも診に参りますので、何かあつたら医局にお知らせ下さい。私は周^{しゅう}笙^{しょう}鈴^{りん}と申します」

二十代の後半ほどに見える笙鈴は、自分こそ療養が必要なのではと思うほどの細身に似合わず、てきぱきと医官を助けていて頼りがいがありそうだ。

「怖いわ、もしかしたら珍貴妃の呪いかも」

魅音が怖がつてみせると、笙鈴は静かに魅音を見つめてから、優しく微笑んだ。

「悪い思念や霊力は感じません。大丈夫ですよ」

「わかるの？」

「ええ、昔から私、そういうのに敏感で」

どうやら、笙鈴は高い靈感があるらしい。

「翠蘭様からは、とても明るい思念しか感じません」

「ほんと？ よかった」

（なかなか見^み所^{ところ}のある人間ね。……よし。アザを大きくしたら、笙鈴に知らせよう）

魅音は思いながら、仲良くなっておこうと色々と話しかける。

「医官と、助手のあなたの二人だけで、後宮中の人を診るの？ やっぱり女性だから、あなたの役割が大きそう。大変ね」

「そうですね……診察以外にも、医局の掃除から医官の洗濯物まで私がやっているのです、さすがに忙しいです。でも、いずれは人を増やしていただけるはずなので」

「そうね。頑張って」

応援しつつも、今後とも仮病で迷惑をかけることがちょっと後ろめたい魅音である。

そして一ヶ月で、魅音は顔にまでアザが出てしまふ展開まで持っていた。

その間、笙鈴は誠心誠意手を尽くしてくれた。書物を読み込み、効きそうな薬種やくしゆがあるとわかれば医官にかけあつて後宮の外まで買いに行き、薬の調合も配合を変えてあれこれ試してくれたのだ。さすがの魅音も、心が痛んだ。

そこで、郷に帰ることが決まった日、魅音は彼女に心からのお礼を言ったものだ。

「あなたには本当にお世話になったわ、ありがとう」

「いいえ、お力になれず申し訳ありません……。でも、こんなところにいるよりも故郷で、馴染なじんだ水や食べ物を口にすれば、きっとよくなりますから！」

笙鈴は涙ぐんでいた。

「（「こんなところ」……そうよね、人間で靈感があると、こんな場所は色々と見えちゃって、めっちゃ

くちや嫌でしょうね)

そう思った魅音は、聞いてみた。

「あなたは、先帝の死を機に後宮を出ようとは思わなかったの？」

笙鈴は少しキョトンとした顔をしてから、あつ、と声を上げた。

「違うんです、私、今の陛下の御代になってから来たんです。本当に、つい最近のことです」

「あつ、そうだったの。とても仕事ができきしているから、もう長いんだと思っていたわ」

「お、恐れ入ります！」

恐縮する笙鈴を見て、魅音はそれ以上は聞かないことにした。

(わざわざ『こんなところ』にいるからには、理由があるんでしょうね。雨桐も言葉を濁していたし)

口減らしのために家を出された者、身内が何らかの罪を犯して連座して働かされている者——宮女になる理由は様々だ。今、後宮に残っている宮女の中には、辞めたくても辞められない者がそれなりにいるのかもしれない。

とにかく、魅音は諸々の手続きを済ませ、荷物をもとめ、やがて春たけなわの季節に後宮を出る日を迎え——

——話は冒頭に戻るわけである。



椅子に戻り、俊輝はうなった。

「なるほどな。奉公先の娘の身代わりとして後宮にやってきて、『病氣の娘』に変身することで病気のフリをし、また帰るつもりだった、と」

「そうなんですよ。ですから、後宮で悪さをするつもりなんてありませんでしたし、もちろん陛下に仇なすつもりも、毛頭もうとうございませんでした。ちょっとした方便ほうべんで仙術を使っただけです」

魅音はここぞとばかりに説明し、横目で昂宇をチラリと見た。

「その方術士が、なぜか後宮に結界を張ってみたいですけど、私の事情とは全然、これっぽっちも、関係ないと思います。ですから陛下、このまま陶家に帰していただければ」

「まあ、待て」

俊輝はなぜか、魅音から視線を外さない。

「なぜ結界を張っていたのか知りたいだろうから、教えてやろう」

「結構です」

魅音は即座に断った。

（関係ないって言うてるでしょ！ 聞いたら絶対、ロクなことにならない！）

しかし、俊輝はさらに話を昂宇に振った。

「昂宇、説明しろ」

方術士は、鋭い視線で皇帝に向き直る。

「しかし陛下」

「説明しろ。こいつならわかるかもしれない」

（ほら何か言ってる！ 嫌な予感！）

半ばあきらめた魅音は、自分から口火を切った。

「さては、珍貴妃の怨霊おんりょうが出るんでしょ」

「えっ」

「そいつを外に出さないために結界を張ってる。違う？」

魅音はベラベラと続ける。

「先帝と一緒に他の妃たちをさんざんいたぶった挙句あげく、追い詰められたらキレて自害した妃で

しょ？ そんな強烈な奴なんか化けて出るに決まってるのに、どうしてちゃんと対処しないかなあ。

ちよろつと祓はらい清めたくらいでどうにかなると思っっているなら——」

「待て待て」

思わずと言った様子で、俊輝が片手を上げる。

「当然、こちらも念入りに対処した。まず、先帝と珍艶ちんえん蓉は火葬にした。そして身の回りの品と

もに廟に封じた」

艶蓉というのが、珍貴妃の名である。

普通なら土葬にするところを火葬にしたのは、万が一、魄——身体を動かす力——が残っていて蘇よみがえってしまふのを避けるためである。照帝国では、罪人は火葬にする決まりになっていた。

それでも、特に強い恨みを残した怨霊は鎮めきれないことがあるので、遺骨は方術を施した廟に封印したわけだ。

「さらに、珍艶蓉が暮らしていた珍珠宮は祓い清めて取り壊し、跡地に鎮魂碑を建てた。しかも、この際だからと後宮の建物は全て祓い清めたのだ。珍艶蓉の怨霊が暴れ回っている様子はない」

「違うんですか」

魅音がきょとんとしていると、昂宇がしぶしぶ口を開いた。

「違います。供養した、その後の話です」

「その後？　ていうか、あなたはこういう関係の人？」

「僕は、太常寺たいじょうじに所属する方術士です。後宮の妃や宮女が亡くなった時などに葬儀を行うのも仕事です。……が、手が足りないからといって他にも色々手伝えとつつかまっ……こ、光栄にもお声かけいただき、陛下のお側で手足となつて動いております」

太常寺は役所の一つで、祭祀や儀礼を取り仕切っており、それに伴う音楽や卜占なども担当している。照国の方術士は、ここの下位機関に所属している者が多い。

「昂宇が全て取り仕切ってくれた方が、俺は助かるんだがな。戦っている方が楽だ」

何やら言っている俊輝を見ないようにして、昂宇は続けた。

「まず、今の後宮について説明します。俊輝様によって先帝が討たれ、当時の後宮は解散となりま

した。生き残っていた妃たちは、功労者に下げ渡されたり、出家して尼になったりしました」

（別に、そんなの普通だわ。皇帝が代替わりするときって、たいていそうでしょ）

魅音は心の中でつぶやきながら、仕方なく続きを聞く。

「宮女たちは、もう後宮はこりごりだと。先帝時代は外出許可すら出ず、幽鬼や鬼火の出る後宮に閉じ込められていたので、早く逃げたいという者が多かったんです」

「まあ、わかる気はする」

「そのため、彼女らが後宮を離れるのを陛下はお止めにならなかったもので、ほんの一部の宮女しか残りませんでした」

その、残った宮女の中に、雨桐や青霞がいたわけだ。宦官は他に行き場がないのか、減らなかったようだが。

「陛下は『後宮のことは後回しでいい』とおっしゃいましたが、残ってくれた宮女だけでは仕事が終わらないので、天昌で声をかけて何とか少し増やしました。次は、妃ですが」

ため息混じりの昂宇を、俊輝はじろりと見る。

「国の建て直しが急務なのに妃にかまっている暇などないし、妃が大勢いたら宮女も大勢必要になってしまふ。少なくとも今はどうでもいい」

「と、こんな調子でいらっしやるので、とにかく建前だけでもと、四人の女性を妃として迎えることにしました。こう、四夫人っぽく……?」

昂宇の言葉に、魅音は（疑問形かい）と思いながら突っ込む。

「翠蘭お嬢さんは間に合わせだった、と」

「平たく言えばそうです」

（平たく言わなくてもそうですが？）

ムスツとして、俊輝もやはりムスツとした様子で言う。

「別に、お前たちをないがしろにしようとしたわけではない。四人の妃が何不自由なく暮らせるようには手配した。宮女の人数も、四人の世話をするくらいなら十分足りているはずだ。こうして後宮は再編成の上、稼働したわけだが」

「軍ですか」

小声で突っ込んで、俊輝はため息をついた。

「そこへまた、怪異が起こり始めたのだ」

「へ？ しつかり被ったのに？」

「そうだ。もうこれは珍艶蓉とは無関係なのかもしれない、とも考えてみたが、他の原因が見つからなくてな」

昂宇が口を開いた。

「そこで、僕に新たな命が下ったのです。宦官のふりをして後宮に入り、怪異の原因を突き止めよ、と。しかし、僕にもすぐにはわからず……とにかくおかしなものを逃がさないようにと、つい先日になって、後宮のぐるりに結界を張り巡らせたんです」

「私が引つかったのはその結界かあああ」

思わず、魅音はがっくりと床に手を突く。

つい最近、彼女がここに来て以降に張られた結果だった、というわけだ。

（ああもう、やっぱり人間の身体って不便！ 前世だったら、結果くらい絶対に気づいたのに！）

現在の彼女は、そういった霊力を自分が発することはできても、受けることはほとんどできない。
「というわけで、だ」

俊輝が軽く身を乗り出す。

「魅音、だったな。お前、怪異の原因を探れ。見つけることができたなら、俺をたばかった件は不問にして故郷に帰してやる」

「はああ!? 嫌です!」

魅音は嘔みついた。

「どのくらい時間がかかるかわからないじゃないですか! もうこの後宮は寺院にでもして、新しい土地に新しく後宮を作ったらいかがですか? 皇帝陛下ってお金持ちなんでしょ!」

「国庫の建て直し中に何を言うか。今度はもったいない妖怪が出るわ」

俊輝はバツサリと言った。

「無駄遣いは敵だ。掃除でも何でもして使えるなら、そのまま使う」

「えええーケチー」

思わず魅音は非難した。

（ケチといえば、即位式も略式でやったとか聞いた気がする!）



俊輝は怒るでもなく答える。

「ケチで結構。別にお前一人でやれとは言わない、昂宇をお前付きにしてやる。引き続き宦官の振りだな」

「えっ!？」

ギョツと目を見開いた昂宇が、勢いよく振り向いた。

「俊……陛下、僕はもう後宮なんか、行かなくていいのでは……?」

思わず魅音が「『後宮なんか?』と突っ込んでいると、俊輝が魅音を軽く顎で示した。

「さすがにこいつを自由にさせる訳にはいかんだろう。見張りが必要だ」

「あ、あの……申し上げます」

雨桐が遠慮がちに、魅音と昂宇を見比べる。

「お妃様方が揃った今、陛下以外の男性と何か間違いでもあったら……いえ、昂宇殿を信用しないわけではありませんが、その、お妃様方や宮女たちの方から何かする、ということも」

「それについては心配ない。出入りするの俺と昂宇だけ、そして俺が女たちに手をつけなければいい」

俊輝の答えは明快だ。

「もし誰かが身ごもりでもしたら、その女と昂宇を処罰して解決だ。というわけで昂宇、行け」

「そんな……」

昂宇は何やらガツクリきているようだが、魅音はとつくにガツクリしている。

(完璧^{かんぺき}に脱出に成功したと思ったのに、最後の最後で……！ くっそお、やるしかないか！)
仕方がないので、覚悟を決める。

(ちゃちゃつと解決して、お嬢さんのところに帰るんだから！)